

7
SIDE

LIVING

FEATURE :
LIFESTYLE WITH TILES



2022 ISSUE

創刊
1st ISSUE



タイルのあふれる生活

LIVING & CULTURE
MAGAZINE
BY INAX MUSEUMS # 1

TAKE FREE

NOT FOR SALE

LIVING & CULTURE
MAGAZINE
BY INAX MUSEUMS # 1



すでにそこにある磁場、常滑。

SPECIAL INTERVIEW

大竹 伸朗

SHINRO OHTAKE

2022 ISSUE



INAX MUSEUMS

SIDE
C

CULTURE

FEATURE :
THE WONDER OF TOKONAME

すでに そこにある 磁場、常滑。

FEATURE : THE WONDER OF TOKONAME

古くからやきものの産地として知られ、INAXライブミュージアムが館を構える地・常滑。今特集では、このまちが持つ不思議な魅力について改めて見つめ直すべく、さまざまなスタイルで文化的な活動を行う人々にお話を伺いました。まずは、日本を代表するアーティストの一人、大竹伸朗さん。2007年、初めて常滑のまちを散策した際、この地域特有の“磁場”を感じたという大竹さん。2021年夏、大竹さんのお気に入りスポットであり、INAXライブミュージアムからすぐ近くにある、東窯工業敷地内に取材撮影を敢行。常滑のことから自身の活動について、今考えていることなど(掲載しきれないくらい)大いに話っていました。

取材撮影日：2021年8月31日

SPECIAL INTERVIEW : SHINRO OHTAKE

大竹伸朗と、

大竹伸朗と常滑 —「焼憶」の記憶

— 当時のINAX(現・LIXIL)と大竹さんの関係が始まったのは、2007年の直島での作品「直島銭湯 I ♥ 湯」がきっかけだったんですよね？

後藤泰男 (INAXライブミュージアム主任学芸員) : 直島のアートプロジェクト全体を主催しているベネッセホールディングスさんから、当時のINAX岡山営業所に「銭湯のタイルを焼けないか」という話をもらって、大竹さんが「I ♥ 湯」で使用する銭湯の壁画タイルを弊社が提供したことが交流の始まりでした。

尾之内明美 (INAXライブミュージアム館長) : 大竹さんは、それまでの作品作りの中では、やきものは使われてきていなかったと思いますが、当時常滑に来ていただいたのがきっかけとなって、やきものに可能性を見出していただいたのでしょうか？

大竹：そうですね。かなり前からやきものに強い興味があって土を成形して焼いたりタイルに絵付けしたりとかを経験したい思いが長年ありました。タイルに一気に興味持ち始めたもんね。

後藤：最初、大竹さんが蛍光色の絵を持ってこられたんです。この絵をタイルに焼いて欲しいって言われて。でも、蛍光色を出すためには鉛の釉薬を使わないといけなかったんですが、環境問題的に鉛は使えなくなってまして。

大竹：タイルの釉薬に鉛を入れるとすごいきれいな色が出るんだよね。でも1970年頃から公害が一気に社会問題になってきて、鉛の使用が出来なくなってしまっ。銭湯で使うタイル絵のイメージが、どうしても派手な色のイメージだったんだけど、でもそれができないということがわかって、じゃあどうしよう？となった時に、館内のトイレに使ってあった青色の「呉須」※っていう絵付の顔料を見せてもらって。その色が気に入って、これだったら問題ないっていうから、青一色で描いた。

※呉須＝染付の絵を描くのに用いるコバルト顔料のこと。焼成すると、コバルトブルーに発色する。

後藤：でも、その焼き付けの工程の時に、窯の中で事故があったんですよ。



取材・文：武部敬優 (LIVERARY)
撮影：対馬一宏 (TONE TONE)
撮影協力：東窯工業株式会社

大竹伸朗と常滑①

大竹伸朗「焼憶展」
会期：2013年2月9日(土) - 6月9日(日)
会場：INAXライブミュージアム「世界のタイル博物館」企画展示室

本展で大竹氏は、タイルへの焼き付け(プリント)による表現に挑戦。大竹氏のコラージュ作品や、常滑の街のディテールを写した写真を正方形のタイルに焼き付け、それらのタイルをさらにコラージュし、立体作品が制作されました。作品の中にはすでに本来の役割を終えたやきもの製品の試作品も素材として用いられ、そうしてできた作品は、大竹氏のうちに秘められた「記憶」や、素材として用いた「もの」たちのなかにある「記憶」を浮かび上がらせるものとなりました。(「INAXライブミュージアム」プレスリリースより引用)



「焼憶展」ポスター

SIDE : CULTURE

C

焼憶と、

常滑と、



LIVING & CULTURE
MAGAZINE
BY INAX MUSEUMS

すでに
そこにある
磁場、常滑。

FEATURE: THE WONDER OF TOKONAME



「焼憶展」会場より 撮影大崎保利

大竹：ああ、そうそう。窯の温度が途中で上がらなくて止まってしまっって……。

後藤：あの時はもう、僕ら大竹さんに話しかけるのすら怖かったですもん(笑)。

大竹：最悪の場合、全てのタイル絵を描き直さなくては……ってところだったんだけど、窯から出してみたら結局きれいに焼けていて。

後藤：その奇跡的な体験を、当時大竹さんは「常滑磁場」って言ってたんですよね。

—— 大竹さんにとって、常滑に「磁場」を

感じる出来事は他にもありましたか？

大竹：常滑に来た時、「やきもの散歩道(※1)」とか何度か歩いたけど、やっぱり歩くと地面の起伏とか、地形ってものを感じられて。常滑のまち中にある「登窯(※2)」という窯はこの地形だからこそのものだし、常滑の土地は、やきものを作るのに適した土で、昔から「やきものの磁場」だったんだろうけど。でも、最初に常滑の土がやきものに合ってるって気づいた人って何で気づいただろう？って想像すると面白いよね。初めてウニを食べようと思った人とか、最初に洞窟に絵を描いた人とか、一番最初に笑った人っ

※1 昭和初期ごろ最も栄えた窯業集落一帯を指す。今も点在する煙突・窯・工場など、時代とともに使われなくなった歴史的産業遺産を巡る常滑の人気観光スポット。

※2 陶磁器を焼く窯の一種。山の傾斜に沿って階段状に築き、下方からしだいに上方へ焼きあげてゆくもの。余熱を巧みに利用した東洋古来の窯。常滑の「やきもの散歩」に残る「登窯」は、1887年(明治20年)頃に築かれた窯で1974年(昭和49年)まで使用されていた。日本で現存する登窯としては最大級。

太竹伸朗と、



SPECIAL INTERVIEW : SHINRO OHTAKE

て何を見て笑ったんだろう？とか、散歩道歩きながらそんなことを考えていました(笑)。誤解を恐れずに常滑の好きな点をあげれば「ちょうどいい塩梅に寂れているところ」です。中途半端に今風なものを取り入れて若者のニーズを探りつつ、すぐに“全国区”といった言葉を引き合いに出す地方都市が一番つまらないし中途半端に感じる。「やきもの散歩道」でリタイアした老夫婦とたまに会釈しながらすれ違ったり、道脇にグッとくるやきものが誰にも盗まれないまま放置されていたりとか、そういったことは直接的に金銭には繋がらないけどずっと記憶に残る。“寂れ方”の作法といった世界があって、その大半は貧乏くさく寂れていくのですが、常滑の寂れ方には品があってこれは計算して生まれるものじゃない。常滑は個人的には“いい塩梅”をいつも感じます。

—— その後、『焼憶展』がINAXライブミュージアムで開催されることになったのは、どういう経緯で？

後藤：最初、「大竹さんに弊社の新作トイレの審査員をしてください」ってご依頼をしたんです。でも大竹さんは「審査員はできない」というお話になって。そこから「じゃあ、トイレ作ろうか」っていう話に発展して常滑に来ていただいて、そこからいろいろ話を進めていって、「じゃあ展覧会やりま

しょう」って話になったんですよ。

—— INAX的にはまさかの嬉しい展開ですね！

後藤：そうなんです(笑)。

大竹：で、やっぱり展覧会をやるとなると、ただタイルに絵を描いて並べるといった安直な展示はやりたくなくて。だから、やきものでまだ誰もやったことがないようなことをやらないと意味がないんじゃないのかなって考えて。そういう考え方は現代美術っぽいかもしれない。

—— 「焼きもの」の「焼」に「記憶」の「憶」と書いて『焼憶展』というタイトルで、まさに大竹さんらしい、ネーミングセンスが光ったいいタイトルだな～と思ったんですが、これはたまたまびったりな言葉を思いついたってことですか？

後藤：大竹さんが自販機の前でしばらく一人でずっと考え込まれていた姿を思い出します。すごい時間をかけて、あの時ふと『焼憶』という言葉が出てきたんですよ。

大竹：やっぱり意識して考え始めるとなかなか(言葉は)出ないんだけどね。でも、ふと「焼きもの」って「記憶に焼き付けたもの」とも言えるんじゃないかと。そこから一気に。

—— 『焼憶展』に関しては、先に展示が決まっていた、途中でタイトルが思いついたっていうことでしたが、他の展示の場合は後からタイトルを決めた感じですか？例えば、ビル作品を多数展示した『ビル景』とか。

大竹：『ビル景』は、作品を制作していた時期まで遡ると俺が22、23歳の時なんだけど。その時は「ビルをテーマに描いたら面白いんじゃないか」とかって全然考えてないわけで。40年くらい経って、結構ビル描いてるな～みたいところから、自分の作ってきたビルをテーマにした作品の流れが見えてきて、それを展示した形。

大竹伸朗
と常滑②

「焼憶展」に合わせて制作された「ニュータイル／常滑」Tシャツ(白・黒)。¥3,850(税込)。INAXライブミュージアム内ショップにて販売中。在庫僅少。



と憶焼と興起

大竹伸朗の ニューノーマル ーコロナ禍で見えてきたこと

大竹: やっぱ10年くらいじゃ何やってるかわからない、40年くらいやらないと。いろんなタイプの作品が違った周期でぽこぽこ出てくるんだけど、1日1日の視点で見るとそれがよくわからない。傾向の似た作品を分類して40年くらいの時間の上に時系列に並べてみるとそこに一定の周期があることに気づくわけ。大きな周期の流れが見えてくる。『ビル景』はそういう経緯で生まれた展覧会だった。

ー 作品を作ってる理由の一つに、最終的には誰かに見せたいっていうのはあるんですか？

大竹: それはある。普段からは特に誰かに見せるために描いてるっていう意識はないけど。極端な話、山の中にひとりでもってずっと描いてて、ずっとテンション保って、それでハッピーにいられるかって言われるとそこまでの精神的な強度はないと断言できる。作品を発表することで、全くの赤の他人からの意見との出会ってのがあって、ボロカス言われたり、褒められたり。それが次に繋がっていくように思う。人に見せる目的で作ってるわけじゃないのだけど、定期的に吐き出したいなっていう気持ちが近い。特にこの丸2年は鬱積して、仕方ないよね。

ー そうなんですね。コロナの影響で？

大竹: 去年(2020年)の9月にやろうとしていた展示が延期になってそれを今年の10月にやるのか？といった全く先の予定が立たない状況で。去年は海外展含めて6カ所くらいが無くなってしまった。今のところ、何の発表の機会もなしに、ただただずっと作ってる毎日。田舎住まいだからやることがないわけよ。昼間

絵を描いて、夕方になったら散歩してみたいな毎日。以前は散歩してる爺さん婆さんを見て、「散歩して何が面白えんだ？」と思っていたけど、気づいたら散歩してて。つい1年前はまさか自分自身が毎日散歩するなんて思いもしなかったんだけどさ(笑)。

ー (笑)。最悪ずっとこのコロナ禍の状況が続いていったら、モチベーションをどこに持っていこうって感じになってきますよね？

大竹: 改めて考えれば毎日何かを作って散歩するといったローテーションほど理想的なことではない、そんなこともコロナに気づかされたんじゃないかな。結局創作の刺激は外界ではなくそれぞれ自身の内にしかないと思うし。創作のための刺激として何か新たな「モノ」を所有したいといった気持ちもありないしね。

ー インプットしたいものがない？

大竹: インプットしたいものがないってことではなく、そういうのは自然に入ってくるっていうかさ、インプットは意識的にするモノじゃなくて求めなくても「起きる」のだと思う。そもそもこっちからあんまり求めない。

ー 先ほどお話しいただいた『焼憶展』に関しても、たまたま銭湯でのタイルの作品を作ることになって、常滑に来たことがきっかけになり……という偶然があったと思いますが、展示へのモチベーションや、大竹さんの創作を突き動かす要因の一つとして、「偶然性」が大きいように思えますね。

大竹: 『焼憶展』をやろうと思った経緯に関して言えば、後藤さんとの出会いが大きい。後藤さんは「タイル＝命!」みたいな人で、今どきこんな人いるんだ! って発見に似た驚きと、あ・うんで分かり合える共通項みたいなものを感じて。そういう人の周りには似たような人が何人



か必ずいて、『焼憶展』は、まさに人との出会いが全ての始まりでした。美術とかの世界でも、相手が美術に関わっている人だから分かり合えるかってそんなことはまずない。なかなか感覚的に分かり合える人って少ない。

ー 美術は特に知識量とかを求められる感じはありますよね。知ってないと良さがわからないようなことも。

大竹: 本来、美術に不必要なのが知識量だと個人的には思います。アートの歴史や背景についての知識があることと絵の良し悪しを感知できるってことは全く話が違う。音楽もそうだけどね。音楽の知識はすごいからって、いい音楽がわかるか？とは違ってくるじゃない？まあ「分かる」ということ自体が抽象的な表現なんだけど、美術や音楽において「饒舌に知識を語る人」に惑わされるな! って教訓が自分にはある。

ー ちなみに、大竹さんって、アートの領域での仲のいい作家さんとかキュレーターとかっているんですか？

大竹: いない、皆無。

ー (笑)。

大竹: 編集者とかミュージシャンとかバーテンとか、近所の鉄工所のお兄ちゃんとか、そういう人で仲が良い人はいるんだけどね。東京にいた時は、いろんなパーティーとかで他の作家や学芸員、キュレーターたちとも会ってしまうけどさ。宇和島に引っ越してから、オープニング呼んでもどうせ来ないだろうって多分思われてるのか、もう招待状もあまり送られてこない(笑)。それくらいの距離感がちょうどいいんだよ。自分のことを振り返ると、パーティーでの出会いはその後ほぼ大したことに発展しなかったって思いは強い。

ー (笑)。

大竹: 自分で“芸術家”だとか思ったところでさ、そんなこと思い込みでしかない。漫画家の赤塚不二夫さんじゃないけど自分のことは“最低の奴”だっであえて自覚している方が健全だと思うね、喧嘩にもならないし。結局“アーティスト”だってプライド持つのかも時には大事だろうけど、何事も時の流れによって淘汰されていく。100年もつかどうかっていうさ。100年もつものが果たして良い芸術なのかどうか？っていうのは別として。言えるのはアートの良し悪しって、とりあえず100年ぐらい経たないとわからないし語れない。生きてるうちに評価するなんて、わからないんだよね、生々しすぎて。自分はどうなっていくのかな？わからないまま終わるんだなあとは思うけどね。ステップアップっていうのともまたちょっと違うのかもしれないけど、もっと違うものができるんじゃないか？そういったことはいつも思っている、思うというよりは無意識的な希望のようなことかもしれないけど。なかなか思い通りにはいかないから、時間の経過もあるし、だんだん体力もなくなっていくし。それは誰しもが逃れようのないことだから作れるうちにもっといろいろ作っていきたいと思う。



インタビュー全文は
LIVERARY
にて掲載



PROFILE

大竹伸朗 (おおたけ・しんろう)

1955年東京生まれ。美術家。熊本市現代美術館(2019)、水戸芸術館 現代美術ギャラリー (2019)、Parasolunit, ロンドン(2014)、高松市美術館(2013)、丸亀市猪熊弦一郎現代美術館(2013)、アートソング・センター・ソウル(2012)、広島市現代美術館(2007)、福岡市美術館 (2007)、東京都現代美術館(2006)などで個展を開催。また、ヴェネチア・ビエンナーレ(2013)、ドクメンタ(2012)、光州ビエンナーレ(2010)、アジア・パシフィック・トリエンナーレ(2018)、横浜トリエンナーレ(2014)、瀬戸内国際芸術祭(2010、2013、2016、2019)など国際展にも多数出展。主なエッセイ集に『見えない音、聞こえない絵』、『ナニカトナニカ』(すべて新潮社)、絵本『ジャリおじさん』(福音館書店)がある。2014年芸術選奨文部科学大臣賞受賞。2022年2月ハワイ・トリエンナーレに参加。東京国立近代美術館にて秋に個展開催予定。



WHY TOKONAME?

巻頭インタビューで、「常滑には特有の“磁場”がある」と語ってくれた大竹伸朗さん。その言葉通り、常滑の地には個性豊かな人々が集まってきているよう。地域文化を耕すデザイナー、全国的にも人気の若手陶芸作家夫婦、サツマイモ農家兼木工職人、新たなコミュニティを形成するカフェオーナー……気になって仕方がない4組に、常滑に来た理由と、今考えていることを伺いました。

素材や地域の文脈を大切に。
産地で学んだ
ものづくりの観点。

デザイナー
高橋 孝治

INTERVIEW WITH KOJI TAKAHASHI

なぜ、常滑に?

「無印良品」のデザイナーだった高橋孝治さんと常滑の関係が生まれたのは、グッドデザイン賞を受賞した茶器シリーズ構想時、常滑焼の窯元「山源陶苑」現社長・鯉江優次さんを訪ねたことがきっかけ。常滑に移住し、常滑のさまざまなつくり手や急須専門問屋「丸よ小泉商店」とともに、時代に合ったプロジェクトを行い、産地の可能性を提案してきた。

移住して4年間は、常滑市や日本遺産六古窯のディレクターとして、人や産地に出会い、やきものを思索。そこで、その土地にある素材や技術、歴史を踏まえたものづくりが生き生きと続いていたことに感銘を受けた。「作家が自ら掘った原土を陶土に仕立てていくのを目の当たりにし、ものづくりの始まりを感じました。常滑には歴史の痕跡や息吹がちゃんと残っていて、それらを実際に見聞きし、何度も触れることができる。産地の価値ですね」と高橋さん。

近年では、福祉という新たなフィールドでの仕事も。障がい者就労支援施設「ワークセンターかじま」の利用者とともに行う、やきもののまちを起点にした創造的なものづくりや、施設の改修計画を地域のさまざまな人たちと進行中だそう。「常滑に来る前から関心のあった福祉と、やきものに関わる仕事で、自分の働くまちで垣根なくつながっていることがうれしいです。常滑に7年暮らしてよりわかってきたこの地域の愛しい文化が次世代まで繋げられるように、土台を整える役目も担っていききたいですね」。



PROFILE
高橋孝治(たかはしこうじ)株式会社「良品計画」の生活雑貨企画デザイン室を経て、2015年に常滑に移住し、企業や団体とプロジェクトを多数行う。2016-2018年常滑市陶業陶芸振興事業推進コーディネーター。2017-2019年 六古窯日本遺産活用協議会クリエイティブディレクター。



MY FAVORITE TOKONAME

『龍池古窯』 愛知県常滑市久米龍池45-22

鎌倉時代に丘陵斜面をトンネル状に掘り抜いて構築されたといわれる巨大な窯跡「龍池古窯」は、焼き物のルーツを辿ることができる。六古窯の中でも迫力のあるスポット。「毎日の通勤路沿いにある、この地域の歴史を感じさせてくれる感慨深い場所のひとつです」。



- ① 高橋さんの常滑案内は、名鉄常滑駅前の「スプリングサニーホテル」屋上(宿泊者は利用可)から、まち全体を俯瞰してもらうのが出発点。
- ② さまざまな土地で採れた土の焼成見本は、含まれる成分がそれぞれ異なり、色もテクスチャーも個性豊か。
- ③ 2021年に「INAXライブミュージアム」で、「陶土染め体験」ワークショップを開催。陶土バッグは、土の素朴な温かみを感じられる。
- ④ 事務所の横に並ぶのは、自作のプロダクトや地元作家のやきもの、古道具など。向かいの小屋を新たな展示販売スペースにする計画も。



ゆるやかに、脈々と。
やきもの文化と思いが生きる。

若手陶芸作家
大澤哲哉・増田光

INTERVIEW WITH TETSUYA ŌZAWA AND HIKARI MASUDA

なぜ、常滑に?

大澤哲哉さんは物体としての格好良さを追求したミニマムな美学が宿る器、増田光さんはカラフルでユーモラスな生き物たちの器やオブジェという、まったく異なる作風の陶芸作家夫婦は、どちらも注目を集めて多くのファンを持つ。出身地の異なる二人は、日本を代表する陶芸家の吉川正道さん・千香子さん夫婦にそれぞれ師事するために、常滑へ来て出会った。「大学でやきものを学びましたが、アシスタントとして密着する中で、陶芸家の生活に自然と馴染んですごく良かったです」と増田さん。大澤さんは「吉川さんたちが年齢を重ねられた今でも国内外でバリバリ活動されているので、『自分ももっと頑張ろう』という気持ちになります」と話す。常滑に根付くやきものコミュニティは、近くにいる陶芸家の存在が心強く、地域からも受け入れられている。

子どもと一緒に三人家族で暮らすのは、築100年の古民家。大澤さんの作陶工房の窓には、常滑焼の土管が一面に埋め込まれた景色が広がり、圧巻のパワーを受ける。「常滑には陶製のお墓もあり、やきものに関わってきた誰かの痕跡をあちこちで感じられます。先人たちがいて、今ここにいることを考えると感慨深く、自分ひとりでやっているみたいな風に思いがってはいけないなと。ここにしかないものに意識的に影響を受けながら、これから僕も、土管の上に積み重ねられる何かを残していきたいですね」。大澤さんの思いのせて、やきもの文化が育まれていく。



MY FAVORITE TOKONAME

『喫茶 壺』 愛知県常滑市樽水町1丁目101

看板代わりに使われている特大の壺。「自分ではなかなか作れないサイズの壺と、その周りが枯山水みたいに囲まれ、このまちだからこそできる現代アートだなと思います。陶芸家の友人が遊びに来ると連れて行き、記念撮影するのが定番です」。(大澤)



- ① 住まいはさまざまな作家が住み続けて、現在は5〜6代目。暮らしやすくなるように、DIYの工夫を凝らした人の手がそこかしこに感じられる。
- ② 家主である大家さんのお父様は昭和初期、牛を飼う運送業を生業としていたのだそう。牛舎として使われていた広い土間を、作品のストックスペースに活用。
- ③ 大澤さんの作品は古道具のような風合いを目指し、成形したベースの土に化粧土を重ね、やすりで磨くことで、独特な質感や表情を生み出す。
- ④ 「日本は、やきものの器作家にとって恵まれた環境。使ってもらう人の要望を受けながら、より良い道具となるものを作りたい」と語る大澤さんの作業場。
- ⑤ 固定観念に捉われない、自由な世界観が人気の増田さんのアトリエ。
- ⑥ 友人やギャラリー関係者のゲストが遠方からも訪問。家に入ると、増田さん作の生き物たちが迎えてくれる思わずほっこり。

PROFILE

大澤哲哉(おおざわてつや)岐阜県多治見生まれ。名古屋芸術大学美術学部造形科を卒業後、吉川正道氏に師事。2015年から常滑で作陶。国内外で展覧会を行い、2022年初夏に北京のギャラリーで開催予定。

増田光(ますだひかり)神奈川県横浜生まれ。武蔵野美術大学工芸工業デザイン学科で陶芸を学んだ後、2008年に常滑に移住し、吉川千香子氏に師事。2012年独立。2021年末には常滑で初の展覧会。



なぜ、常滑に？

「知多半島の空気感に惚れました」。飛騨高山や長野、横浜、京都に暮らして土地ごとの魅力に触れた家具職人の谷本和也さんが独立し、常滑に居を構えたのは9年前。「とある半島にあるお店」という意味合いを持つ「TOALHANT」と、無農薬・無化学肥料栽培のさつまいもで焼き芋やおやつを作る「風と土」を並行するユニークな生活スタイルで、どちらの屋号にも知多半島への畏敬の念が込められている。

「TOALHANT」の前身は知多半島の物産や自作の木製品を扱うショップで、現在は、暮らしている人の日常に馴染むオーダー家具を製作。「常滑は昔からのづくりが根付いていて、まち自体がそれに寛容です。遅くまで作業をしていると、『頑張ってるね』と声をかけられる温かさがありますね」。

「風と土」のさつまいも作りは、自然農の土が育ててくれるのを谷本さんがサポートする気持ちで、1年かけてじっくり向き合う。「夏場は暑くなる時間を避けて明け方から畑仕事をしていると、朝焼けに包まれて。日中は木工の仕事をして、また畑へ。夕日がどんどん広がる写真では収まらない景色を見て、あぁいいところだなと感じます」。家庭菜園のような小さな畑から始まり、近隣農家や地域との信頼関係を地道に築き、今では耕作放棄地を含めた一町歩(9900㎡)ほどに広がった。「ものを売るだけではなく、道中のストーリーや時間・思い出も提供したい」と、今シーズンは収穫体験も準備中。

知多半島の自然を愛する、半農半工の心地のいい暮らし。

サツマイモ農家兼木工職人
谷本和也

INTERVIEW WITH KAZUYA TANIMOTO

WHY TOKONAME?

MY FAVORITE TOKONAME

『多屋海岸』
愛知県常滑市末広町1丁目77

「毎朝海岸まで歩いていて、通りから続く階段を上った瞬間に視界が広がり、伊勢湾まで見渡せる景色は最高です。秋から春には沖の方で海苔の養殖が行われ、季節を感じられるのもいいですね。セントレアから離陸した飛行機や、夕日の絶景が見られることも有名。



- ①家具作りで大切にしていることは、「お客様のイメージをくみ取り、納品時に感動していただける家具づくりを心掛けています」。
- ②取材時は、半田市にあるクリニックのカウンターテーブルに着手。各地の店舗家具を中心に、陶芸家に依頼されたやきもの型を作ることも。
- ③「自分の活動で知多半島や常滑にフォーカスしてもらえれば」と、自身で育てた芋を使った「風と土」の商品は、お土産としても人気。

PROFILE
谷本和也(たにもと・かずや)飛騨高山で木工を学び、各地の家具屋で約10年間経験を積む。2013年に常滑に移住し、「TOALHANT」を設立。体調を崩した療養期に、人の縁で特許製法の焼き芋器と健康食のさつまいもを知り、2016年に「風と土」を立ち上げ、無農薬のさつまいも栽培を開始。



PROFILE

奥原千純(おくはら・ちずみ)長野県出身。ウェブサイトの制作と講師の仕事をしてさまざまな土地を転々としてきた。常滑の古民家をDIYスタイルで改装するプロジェクト「imawo」を始動。コワーキングスペース兼カフェ「まわるカフェ」をして、2022年5月にオープン予定。(住所:常滑市栄町2-87)

- ①家具はすべてもらい物で構成。照明のシェードはコーヒーのフィルターを再利用。
- ②2Fの壁面棚は隠し扉になっており、奥に宿泊用スペースを準備中。
- ③2Fワークスペース。取材当日もフリーランスの仲間たちが集まっていた。
- ④「最初は電気も水道も使えなくて、作業中にみんなで庭で焚き火をしたことも良い思い出です」と奥原さん。
- ⑤場を作っていく過程も大切なコンテンツ。工事の様子はインスタグラムで公開中。



なぜ、常滑に？

「コロナ禍の影響もあり、自分の居場所について改めて考えさせられた」と話すのは、東京を拠点に各地を転々とする働き方をしてきたWEBデザイナーの奥原千純さん。2021年1月に一念発起し、コワーキングスペース兼カフェを作るために古民家探しを開始。以前一度訪れたことのあった常滑に惹かれ、たまたま立ち寄った団子屋で、築80年の古民家を紹介してもらえることに。DIYで工事を進めることにした奥原さんはSNSで改装する仲間を募集。すると、知人や友人だけでなく、奥原さんの思いに反応した同志たちが全国から駆けつけた。さらに、近隣住民の方々も気にかけてくれ、中には手伝いに来てくれる方も。「常滑の人たちがすごく温かかったので、ここでやっていけるなと思った」と奥原さん。

DIY工事を続けていく中で大変な思いも多かったが、「最も驚いたのは発生したゴミの量。何往復も軽トラで運んだ」という。この経験から、珈琲豆のカスを肥料として地元農家さんに引き取ってもらうよう働きかけたり、当初予定していたメニューもゴミが出ない内容に変更するなど、奥原さん自身も新しい価値が芽生え、変化していった。「地球も、人も、物も循環していくんだという気付きがあって、店名は『まわるカフェ』にしようと思いました」。多くの仲間や地域の人々とともに奥原さんが作り上げたこのスペースが、訪れた人々の居場所になり、常滑に新しい刺激と価値感を育んでいくのではないだろうか。



共に考え、育み、転がり続ける、みんなの居場所。

imawo / まわるカフェ
奥原 千純

INTERVIEW WITH CHIZUMI OKUHARA

MY FAVORITE TOKONAME

『Cafe TSUNEZUNE 常々』
愛知県常滑市栄町7丁目164

盆栽鉢製陶所の倉庫をリノベーションした常滑の人気カフェ。「物件探しを始めた頃からずっと気にかけてくださり、お世話になっている場所。オーナーさんを通して、自然と人の繋がりが増えていく素敵な場所だと思います」。



NEWS and TOPICS

NEWS 2022

国際芸術祭「あいち2022」が 常滑市にやってきます！

国内最大規模の国際芸術祭の一つ、「あいち2022」が「STILL ALIVE 今、を生き抜くアートの中から」をテーマに、2022年7月30日～10月10日の73日間にわたって開催されます。国内外から多数のアーティストが参加し、最先端の芸術を「あいち」から発信するというものです。地場産業や伝統工芸の歴史が感じられる場所ということで、今回の会場には愛知芸術文化センターのほか、一宮市、常滑市、有松地区(名古屋市)が選ばれました。平安時代から続くやきものの産地、常滑市に新しい風が吹きそうです。INAXライブミュージアムも市内の会場のひとつに予定されています。アーティストたちの作品をとおしてミュージアムの、また街の魅力を再発見できる機会にもなります。新たな価値観をもたらしてくれるこの芸術祭を、一緒に盛り上げていきます。どうぞお楽しみに。

TOPICS 2022

企画展のお知らせ INAXライブミュージアム

タイル名称統一100周年記念 巡回企画展

「日本のタイル100年 ― 美と用のあゆみ ―」 Japanese "Tile": A Century of Beauty and Utility



撮影：梶原敏英

会 期：2022年4月9日(土)～ 8月30日(火)
会 場：INAXライブミュージアム「土・どろんこ館」企画展示室

建材としてのやきものが、1922年の平和記念東京博覧会において、「タイル」という名称に統一されました。業界としての画期的な出来事から100年。本展では、美と用を兼ね備えた「タイル」が、人々の生活や都市空間の変化に合わせて発展してきた歴史を時代背景と共に、実物資料を豊富に交えながら振り返ります。タイルの魅力に改めて気づき、またこれからのタイルを考えるきっかけにします。同展は、当館、多治見市モザイクタイルミュージアム、江戸東京たてもんの園の3館共同企画によるもので、当館を皮切りに会場ごとに異なる展示構成で巡回する予定です。

関連書籍

日本のタイル100年
― 美と用のあゆみ ―
B5版／全頁カラー／72頁
税込1,650円
〈4月中旬発刊予定〉

INAXライブミュージアムで開催される企画展やイベント、今後の予定などをお知らせします。

STILL ALIVE
国際芸術祭 あいち2022
2022.7.30-10.10



STAFF COLUMN



INAXライブミュージアムスタッフがオススメしたい常滑スポット、館内の通な楽しみ方をご紹介します。

STORY NEIGHBORHOOD
01

カフェ & ギャラリー 麦



カフェからみた伊勢湾の眺望



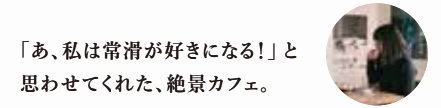
1.仲睦まじい永井さん(左)と片桐さん(右) 2.ギャラリースペースには片桐さんのコレクションである唐津焼のやきものが展示・販売されています。 3.自家焙煎のコーヒーと苺のカスタードパイ(デザートは週末のみ)。セットで税込み800円。食器はすべて作家ものです。

スタッフおすすめ！

常滑よりみち散歩道

#1

CAFE & GALLERY BAKU



「あ、私は常滑が好きになる!」と思わせてくれた、絶景カフェ。

長い東京生活を後に、2020年11月から常滑にある当館に異動となりました。9月に新居を探しにここを訪れ、偶然立ち寄ったのが麦(ばく)さんです。目的地は狭い急勾配の坂を登り切った高台にありました。たどり着くや否や、視界に絶景が飛び込んできました。眼下に見える街並み、その先に広がる青い海と空。それにただ高揚するばかり。飛行機が向かう先にはセントレアも。このカフェは、そんな眺望を独り占めしていました。オーナーの片桐光明さんとパートナーの永井良子さんもこの景色に惚れ込んで8年前、ここに自宅を兼ねたカフェ&ギャラリーを開いたそうです。気さくなお二人には、すぐに親類のように親しみを覚えました。そう、だから、私はこの日、この街に愛着が湧く予感を強く感じたのです。常滑は知多半島の西側にあるので、伊勢湾に沈む夕日を眺めることができます。少し早めに行って、ご自慢のコーヒーと手作りケーキに舌鼓を打ちながら、日没後のピンクに染まる空を待つ至福の時。私にとって常滑の大切な場所となっています。



Information

住 所 | 愛知県常滑市榑水町3丁目138-1
電 話 | 0569-77-2307
営業時間 | 月～水 11:00～17:00、
土・日 10:00～17:00(定休日:木・金)

文：寛天画（INAXライブミュージアム） 撮影：藤谷有紀

Director's Message

館長からのメッセージ



ツナグ、ツナガル、ミュージアム

INAXライブミュージアム 館長
尾之内 明美

新しい日常へと変化が加速する昨今。INAXライブミュージアムにとっても、2021年は様々な変化を経験した年となりました。当たり前に思っていたことをゼロから考えなおす。自分たちを見つめなおす中で思いを強くしたのは、人と人、人とモノ、人とコトをつなぐ存在でありたいということです。本誌の発刊にあたり、古くからライブミュージアムとつながってくださる多くの方々に惜しみないご協力をいただきました。紙面の編集においては、LIVERARYさんとのつながりができ、彼らを通してまた新たなつながりが生まれました。ご助力いただいたみなさまに心より感謝申し上げます。本誌タイトルの元になったキーメッセージ「LIVING CULTURE」は、私たちが大切に考える心豊かな暮らしと、そこに生まれる文化を表すと同時に、太古の時代から現在、そして未来へとつながり、つづいてゆく人の豊かな営みをも意味しています。本誌が当館の分身となって、読者のみなさまに素敵なつながりをお届けできれば幸いです。

通なミュージアム通信

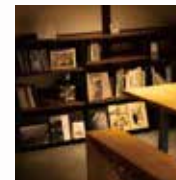
書棚巡り issue



1



2



3

- 「世界のタイル博物館」2階の書籍コーナー
- 「土・どろんこ館」2階ロフトの百土箱の部屋
- 「窯のある広場・資料館」の書籍コーナー

INAXライブミュージアムには、来館者の方が自由に閲覧できる書籍コーナーが3か所にあります。まず「世界のタイル博物館」では、国内外のタイル名所を紹介するビジュアル本その他、建築や装飾、やきものを含めた「タイル」関連書籍を配架しています。常設展を堪能したあとに、写真豊富な書籍をとおして世界のタイルや建築に思いを馳せるのも楽しいひと時です。

次に「土・どろんこ館」ロフトに百土箱の部屋があり、そこで書籍を閲覧することができます。自然科学、左官などの職人技、絵本で学ぶ土のおはなしなど、土や泥にまつわるラインナップを取り揃え、

親子で楽しんでもいただけます。3つめは建屋の小屋組が美しい「窯のある広場・資料館」の書籍コーナーです。2021年に新設され、現在は、LIXIL出版の既刊本から選ばれた建築やデザイン系の書籍を中心に配架しています。その他、常滑の歴史や産業に関する冊子などもご覧いただけます。今後は、建築分野を柱に充実させていく予定です。一日たっぷりライブミュージアムで時間を過ごしていただくために、それぞれの館のテーマに沿った書籍も見どころの一つとして、一息つける書籍コーナーにもぜひお立ち寄りください。

文：高橋麻希（INAXライブミュージアム） 撮影：小坂圭介